

令和元年9月1日～10月6日

図書館4階展示コーナー

大阪芸術大学図書館所蔵品展

## 古画資料の魅力 その2 ー絵画の下絵、模写、画題からー

日本の美術のなかで、古画（こが）と呼ばれる作品は、一般的に昔の世の人が描いた絵を言います。それはどのくらい隔たりのある昔なのでしょう。「十年一昔」のように、ひと時代前を指す言い方がありますが、これは時間の流れがわかる具体的な数字を示すものではありませんので、大まかな括りとしての時間感覚ですが、模写とした回想の場合にはこの表現がしっくりきます。

しかし実際の作品を対象とする絵画の場合は、できるだけ具体的なイメージを捉えるために時代を明らかにしようとしています。日本の絵師の伝記を中心に構成した『古画備考（こがびこう）』という書物が江戸時代末期に編まれました。狩野派の絵師朝岡興禎（あさおかこうてい）がまとめたもので、聖徳太子以降の人物が描いた作品が挙がっています。この本によれば古画の対象は飛鳥時代まで遡ることになります。その時代に現存する実物ばかりでなく、歴史的な記録を取り入れながら書かれていますので、記述を鵜呑みにする事はできませんが、飛鳥時代からですと多くの作品が含まれていることは容易に想像できます。それらに下絵や模写を加えると、その数は計り知れませんが、下絵や模写には絵師の鍛錬や作画過程が込められ、様々な画題を学んでいることなど、本画だけでは見落とされている点にも気付かされますので、なおざりにはできません。

古画資料の魅力を下絵や模写、画題から引き出す展示の2回目です。前回展示した作品の別場面や新たな下絵も加えています。御所にある「賢聖障子（けんじょうしょうじ）」の図様成立に関わる下絵、幕末のやまと絵師浮田一蕙（うきたいっけい）の本画と下絵の関連、大岡春卜（おおおかしゅんぼく）の粉本からは中国の画題の解釈を観ていただきます。古画の魅力は、こうした下絵や模写からもうかがえることを感じていただけることなのでしょう。



賢聖障子名臣像古図 江戸時代



大岡春卜筆 屏風下絵巻 江戸時代



浮田一蕙下絵 大堰川遊覧図下絵・七夕花扇図下絵 江戸時代



(大阪芸術大学 美術学科教授 河田昌之)